

## レファレンス

### コーナー

## 南アジアの輝ける島——スリランカに暮らす人々を知る——

坂井華奈子

スリランカ民主社会主義共和国はインドの南東の海上、赤道よりやや北に位置する島国である。「スリランカ」は、公用語のシンハラ語で「光り輝く島」を意味する。面積約六万五六〇〇平方キロメートル、北海道の八割ほどの国土に約一九六七万人が暮らしている。紅茶と宝石の産地で知られる一方、分離独立を目指すタミル人の「反政府武装勢力」「タミル・イーラム解放の虎」によるテロや紛争についてたびたび報じられている。この国は複数の民族、言語、宗教を背景に持つ人々の暮らす多民族国家でもある。この美しい島に関する紀行文や旅行案内の類は出版されているのを目にするが、いざ探してみると現地の人々の暮らしに深く踏み込んだ内容の本は少ない。本稿では、そこで暮らす「人々」を知る

ための手がかりとなる日本語文献を当研究所図書館の蔵書の中から紹介する。

まず、概要をつかむには、杉本良男編『もっと知りたいスリランカ』（弘文堂 一九八六年）が風土と歴史、伝統と文化、地域の特性、政治経済の情勢といった様々な角度から叙述して読みやすく基礎的な文献である。しかし、出版から年数が経過しているため、新しい情報を補うには辛島昇ほか監修『南アジアを知る事典 新訂増補版』（平凡社 二〇〇二年）を併せて参照することをおすすめしたい。項目名から引くこともできるが、地域編では「自然」、「住民、言語」、「歴史」、「政治」、「経済」、「社会」、「日本との関係」という見出しのもとにページにわたってスリランカに関する記載がある。資料編では、南アジア各国の基礎データや貿易統計、各州・主要都市の人口、国歌や世界遺産、関連文献やウェブサイトのリストが掲載されている。

ユネスコ・アジア文化センター編『栄華と祈りの聖域 スリランカ文化三角地帯』（ユネスコ・アジア文化センター 一九八三年）では遺跡や仏教美術の美しいカラー写真がふんだんに使われており、スリランカの文化を視覚的に知ることができる。中村尚司氏による「スリランカの風土・遺跡・人びと」と題された解説では、背景にある宗教・民族、文化や歴史について書かれている。また、

政治、宗教・思想、芸術の歴史を対照する年表も収録されている。

澁谷利雄ほか編著『アジアの食文化』（建帛社 二〇〇〇年）では、民族の伝統や文化的価値観、自然環境を反映している食文化についてフィールドワークの経験を基に考察し、儀礼と日常、シンボリズム、家庭調理、作法、嗜好品、フィールド・ノートの六つの章に分けて紹介している。スリランカについては「ミルクのシンボリズム」、「手食をめぐる作法」、「スリランカのキンマ」、「スリランカの僧院の食」がある。

人々の実際の暮らしに関する文献として、内藤俊雄「イスル・ンヤスリランカの海外出稼ぎ事情」（同文館出版 一九九〇年）は、スリランカ海外雇用公社で情報処理を担当していた著者のコロンボでの生活と、そこで出会った人々や社会変動について描いている。「イスル・ンヤ」はシンハラ語で「幸せを探して」の意。著者の見たスリランカを通して、我々に本当の幸せとは何かと問いかけている。

実証的観察に基づくデータからみる資料としては、猪口孝ほか編著『アジア・バロメーター 都市部の価値観と生活スタイル』（明石書店 二〇〇五年）がある。スリランカを含むアジア一〇カ国の都市部の住民について比較・分析を行っており、市民の日常を窺い知る上で有効かつ興味深い内容である。質問票も収録されており、調査項目が公開されて

いる。

現地調査に基づいた本格的な研究書には、鈴木正崇『スリランカの宗教と社会 文化人類学的考察』（春秋社 一九九六年）があり、本書は慶應義塾賞を受賞している。

少数民族タミル人の生活については、田中典子『消されたポットウ スリランカ少数民族の女たち』（農山漁村文化協会 一九九三年）が、現地の村に暮らした経験を女性を中心に書いている。ポットウはヒンドゥー教徒の既婚女性が額に描く赤い印。滞在中に起きたタミル人虐殺に対する村人の様子も描かれている。

スリランカの人々を語る上で民族の問題は避けて通れないだろう。紛争に関しては、武内進一編『アジア・アフリカの武力紛争 共同研究会中間成果報告』（アジア経済研究所 二〇〇〇年）収録の荒井悦代「スリランカ紛争年表」が詳しい。関連団体の名称や法律・合意・提案に関する解題もある。川島耕司「スリランカと民族 シンハラ・ナシヨナリズムの形成とマイノリティ集団」（明石書店 二〇〇六年）は、内戦について民族問題の観点から取り組んでいる。一九三〇年代の移民排斥運動を中心に、背景となるシンハラ・ナシヨナリズムの形成過程、移民排斥運動以後の民族問題の展開について、主にイギリスで収集した一次資料を基に考察している。

（さかい かなこ／アジア経済研究所図書館）